



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 7 月 26 日(土)

発行 館長 加 藤 智 一

教育学部の復活

全国的に、義務教育をはじめとする教員の成り手不足、質の低下が深刻な状況にある今日、国立大学の教育学部の復活を求められる動きが加速しています。以下では、この現象がどのような背景から生じているのか、またその意義について考察します。

1 教員不足の現状

近年、教員不足が全国各地で深刻な問題となっています。特に、地方では若い教員の確保が難しくなっており、教員定数を充足できない状況が続いています。これは、少子化に伴い、将来的に必要となる教員の数が増える一方で、既存の教員が高齢化していくため、早期の採用が求められているためです。特に、ワークライフバランスの改善や教員の労働条件の見直しが進む中で、教員を志望する学生が減少しているため、教育学部の再設置が必要とされています。

2 教育政策の変化

文部科学省は、教育の質を確保するために教育学部の設置を促進する方向性を示しています。教員養成に特化した学部を持つことで、質の高い教育者を育成し、地域の教育環境を向上させることを目指しています。また、教育界全体のニーズを反映した教育課程の整備やカリキュラムの見直しが行われ、より実践的な教育が志向されています。

3 地域の教育環境の改善

地域における教員不足の問題を解決するためには、地元の大学に教育学部が必要不可欠です。地域に密着した教育を提供することで、地域社会に根ざした教員が育成され、教育の質が向上します。特に地方公共団体の教育委員会は、地元大学との連携を強化し、学生が地域の教員として定着する道筋を整えることが求められています。

4 歴史的背景と教育学部の意義

教育学部は、戦前から存在する教員養成の伝統的な場であり、長い歴史があります。修士課程や博士課程とも連携し、高度な専門知識や実践的な教育技術を身につけた教育者を育成する役割が期待されています。教育学部の復活は、教育界全体に新たな活力をもたらすと同時に、他の学部や学科との連携を強化することで、総合的な教育環境の向上にもつながるでしょう。

5 教育の未来に向けた展望

教育学部の復活が進む背景には、教員不足や質の高い教育を求める社会のニーズがあります。これを受けて、大学教育のあり方自体も見直されており、地域における学びの場として国立大学が果たす役割が再評価されています。その結果、教育学部の再設置が進むことで、教育界全体の質が向上し、国の未来を担う優れた人材が育成されることを期待しているといえるのではないのでしょうか。

6 結論

経済、社会、教育環境が変わる中で再び教育学部の必要性が高まっています。そのため、国立大学では教育学部の設置が進められており、教員の確保や教育の質の向上に寄与することが求められます。この流れは、教育界だけでなく地域社会全体にとっても重要な意味を持つものであり、持続的な発展が望まれています。



日本の最高気温

7 月 22 日は 24 節気という「大暑」。かつて山形市は、1933 年（昭和 8 年）7 月 23 日から実に 74 年間破られなかった日本一の記録を持っていました。それが当時の日本の最高気温 40.8℃という記録。これを破ったのが、2007 年（平成 19 年）8 月 16 日埼玉県熊谷市と岐阜県多治見市の 40.9℃。もうないだろうと思ったら、2013 年（平成 25 年）7 月 23 日、四万十市で 41.1℃を記録。お気付きでしょうか。記録を更新した日は、7 月 23 日(2 回)と 8 月 16 日。かつて「10 月 10 日が東京の晴れの特異日であったことから、1964 年の東京オリンピックの開会式の日選ばれた」などと言われたことがありましたが、最高気温の特異日というのもあるのでしょうか。